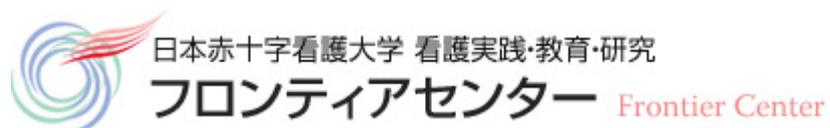


看護実践・教育・研究
フロンティアセンター
平成 26 年度実績報告



目次

A. 目的と運営	1
1. 目的	
2. 組織運営	
B. 事業	3
1. 認定看護師教育課程部門	3
2. フロンティアセミナー部門	6
3. 災害看護部門	11
1) 地域防災活動ネットワーク	11
2) 浪江町健康調査支援	15
3) 災害看護・支援活動情報収集	24
4. 研究・実践リンク部門	26
1) 新人看護師をサポートする会	26
2) ケアリング・フロンティア広尾	26

A. 目的と運営

1. 目的

日本赤十字看護大学看護実践・研究・教育フロンティアセンター（以下、フロンティアセンターという）は、大学がこれまで蓄積してきた知的・実践的ノウハウをもとに、人々に求められる看護の可能性を追求し、開かれた大学をめざして平成17年8月に開設された。新たな発想で創造的な活動を行う必要があるとの共通認識のもとにスタートし、10年目を迎えた。

本センターの目的は次の3つである。

- (1) 大学としての教育機能を学内にとどめず、広く国内外の社会に貢献する資源として活用できるようにする。
- (2) 研究活動を通してその知見を学内外に発信し、研究成果を社会共有の知識として広め、人々の福祉と健康に資するために活用する。
- (3) 多様化する社会・個人のニーズに対応しつつ、一人ひとりを大切にしたい新しい看護活動を推進する核として活動する。

2. 組織運営（図1）

フロンティアセンターは、日本赤十字看護大学学則第43条の3第2項に規定する学部、大学院からは独立した研究施設として位置づけられている。フロンティアセンターは、①研究・実践リンク部門、②災害看護部門、③フロンティアセミナー部門、④認定看護師教育課程部門、⑤広報に大別され、フロンティアセンター長と各部門長を置く。同センターの運営は、フロンティアセンター運営委員会において検討している。運営委員会の構成員はフロンティアセンター長、学部長、部門長、事務局長、事務局である。運営委員会は、平成26年度は年11回開催し、①年間計画及び会計・予算、②認定看護師教育課程の運営、③各事業の運営等について検討した。運営に関わる財源は、原則として自主財源である。フロンティアセンター専従の職員は雇用せず、事務局が兼担している。平成25年度に実施した事業のうち、リサーチフェスタ、新人看護師のサポート（ホームカミングデーと共催）、フロンティア・セミナーの開催にあたっては、学内で企画実行委員を募集し運営した。

平成25年度より開始した、広尾地区の保健医療福祉・教育が一体となってケアを創造するシステムとしての「ケアリング・フロンティア広尾」も2年目を迎え、各プロジェクトが動きだしている。災害看護支援活動としての浪江町健康支援は安定的な活動を展開している。フロンティアセンターの中核的事業であった認定看護師教育課程は、平成26年度末をもって閉講することになった。

今後は本センターが中核となり、大学と地域社会との連携をますます強化していけるように、新たな組織体制を構築していく予定である。

B. 事業

1. 認定看護師教育課程部門

1) 概要

平成 18 年度より、特定の看護分野において熟練した技術と知識を備えた質の高い看護実践能力を備え、医療・看護の向上を図りうる看護師を育成している。

平成 23 年度から開講した「糖尿病看護」「認知症看護」「慢性呼吸器疾患看護」の 3 分野について、経営会議・教授会の審議を経て、本社看護部・学園本部との協議の結果、平成 26 年度をもって閉講することとなった。教育課程は、武蔵野キャンパスで 6 月 2 日～12 月 1 日の半年間の日程で開講した。

<授業風景>



<実技演習の様子>



<実習報告会>



2) 入学・修了状況（表1）

平成26年度入学者については、平成25年9月に選抜試験を実施した。しかし、定員に満たなかったため、平成26年3月に2次募集を行った。その結果、糖尿病看護コース28名、認知症看護コース29名、慢性呼吸器疾患看護コース23名、合計80名の研修生が入学した。そして、平成26年12月1日に所定の科目を修了した77名と前年度入学者で修了延期となっていた1名に修了証書を授与した。

表1. 平成26年度認定看護師教育課程入学者数および修了者数

コース名	入学者数			復学者等	研修者総数	修了者数					未修了者数	備考
	赤十字施設	その他施設	入学者合計			赤十字施設		その他施設		計合		
						25年度生	26年度生	25年度生	26年度生			
糖尿病看護	5	23	28	0	28	0	5	0	22	27	0	平成26年度生退学1名
認知症看護	5	24	29	1	31 (内1)	1	5	0	22	28	0	平成25年度生退学1名 平成26年度生退学2名
慢性呼吸器疾患看護	4	19	23	0	23	0	4	0	19	23	0	
合計	14	66	80	1	82 (内1)	0	14	0	0	78	0	

()の数字は、平成25年度の未修了者

3) フォローアップ研修と認定審査合格状況（表2・3）

平成27年3月11日にコース別にフォローアップ研修を開催した。内容は、認定審査模擬試験と講評および、認定審査対策講義で構成され、1日間のプログラムである。本センターの修了生78名に加え、他の認定看護師教育課程の修了生52名、合計130名の参加者であった。平成26年5月20日に実施された第22回認定看護師認定審査には、本センター修了生88名が受験し、全員が合格した。

表2. 平成26年度認定看護師教育課程フォローアップ研修申込状況

実施日:平成27年3月11日

コース名			申込数計	備考(他機関名等)
	本学修了生	他機関修了生		
糖尿病看護	27	5	32	日本看護協会看護研修学校(2) 地域医療機能推進機構本部研修センター認定看護師教育課程(1) 岡山県立大学認定看護師教育センター(2)
認知症看護	28	47	75	長野県看護大学看護実践国際研究センター(14) 日本看護協会看護研修学校(14) 日本赤十字秋田看護大学(18) 山梨県立大学看護実践開発センター(1)
慢性呼吸器疾患看護	23	0	23	
申込数合計	78	52	130	

表3. 第22回認定看護師認定審査結果報告
(受験日:平成26年5月20日)

日本赤十字看護大学看護実践・教育・研究センター

コース名	受験者数				合格者数				合格率 (本学)	合格率 (全国)
	H23年度 修了生	H24年度 修了生	H25年度 修了生	受験者数 合計	H23年度 修了生	H24年度 修了生	H25年度 修了生	合格者数 合計		
糖尿病看護	0	1	30	31	0	1	30	31	100.0%	100.0%
認知症看護	0	1	28	29	0	1	28	29	100.0%	99.3%
慢性呼吸器疾患看護	0	0	27	27	0	0	27	27	100.0%	100.0%
感染管理	1	0	0	1	1	0	0	1	100.0%	93.0%

4) 今後の課題

フロンティアセンターの認定看護師教育課程は、今年度で閉じることとなったことから、平成 26 年度入学の研修生が未修了となった場合、その後の受け皿がなくなるため、平成 26 年度開講期間中に全員が修了できるようにすることが課題であった。開講後、心身の問題を抱えてやむを得ず退学した研修生以外は、教職員・実習指導者の熱心な教育的関わりがあり、前年度に実習再履修となっていた研修生も含めて全員が修了できた。「糖尿病看護」「認知症看護」「慢性呼吸器疾患看護」3分野で4期の教育を行ったことになるので、修了生のフォローの意味合いから平成 27 年度以降にスキルアップセミナーを企画する予定である。尚、このセミナーの参加によって 5 年後の認定資格更新時のポイント加算対象となるように内容を検討していくことが課題である。

認定看護師教育課程は、2006 年度から 2014 年度まで 9 年間で 866 名の修了生、6 分野 788 名の認定看護師を輩出した。(2014 年度修了生の認定審査は 2015 年 5 月実施予定)

表 4. 認定教育課程修了者数

年度	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
修了者数	93	96	91	91	95	115	121	86	78

2. フロンティア・セミナー部門

平成 26 年 12 月 13 日 (土)、日本赤十字看護大学にてフロンティア・セミナーを開催した。当日は様々な医療機関や大学から 130 名が参加した。そのうち外部からの事前申し込み者が 103 名となり、高い関心が寄せられたセミナーであった。

第 1 部は、日本赤十字看護大学、守田美奈子教授の座長のもと、本学看護教育学の佐々木幾美教授による「看護師に対して教育的かかわりができる人材の育成・支援」に関する基調講演が行われた。佐々木教授より、教育的かかわりができるためには、単に知識や技術を学習者に伝達する方法を理解すればよいというものではなく、学習者を理解しその状況に合わせてともに考えていくという教育的関心が必要となると話された。そのためには、看護基礎教育の中で看護学生の教育的関心を育むこと、病院全体に教育的関心を育成するような組織文化を醸成することが重要であること、院内の教育全体を担う教育責任者の育成とともに、実際に現任教育を企画・運営する組織（教育委員会など）のメンバーの育成が鍵となるとの指摘がなされた。このような人材育成については、これまで主に院内の研修や職能団体などの研修を中心に展開されてきたが、今回の講演では看護大学・大学院がもつ教育的な機能を活用し人材育成をおこなっていくプログラムを構築するという具体的な提案がなされた。

第 2 部では、日本赤十字看護大学の鶴田恵子教授と日本赤十字社医療センターの大和田

恭子看護副部長による座長のもと、日本医科大学武蔵小杉病院から泊瀬川紀子副看護部長、虎の門病院から福家幸子看護部次長（教育担当）をシンポジストとして招き、各病院の教育内容とシステムについて話を伺った。日本医科大学武蔵小杉病院では、看護部ジェネラリストリーダーにおけるレベルごとの教育プログラムにおける実際の運営とその課題について、それらを通して教育を担う看護師の役割および育成について説明があった。正規看護師の7割以上が大学卒業者である虎の門病院では、全国の様々な大学で基礎教育を受けてきた看護師が多く、現在行われている現任教育の実際と今後の課題、特に大学との連携についての説明があった。

セミナー参加者のアンケート結果からは、9割弱の参加者が「よかった」「とてもよかった」との肯定的な評価を得た。自由記載の項目では、「臨床での教育の視点を学ぶことができた」、「他施設の教育への取り組みがわかり、とても得るものが大きかった」、「討論への参加というスタイルがとても良かった」等の感想が聞かれた。また、多くの参加者が佐々木幾美教授が提案した大学・大学院がもつ教育的な機能を活用した人材育成プログラムについて高い関心を寄せ、「ぜひ参加したい」「期待している」との意見をもつ参加者も多く、次回のセミナーへの期待が高まった。

最後に、本セミナーを後援する日本赤十字看護大学同窓会の竹内幸枝会長より挨拶を頂き閉会となった。今回のセミナーを受けて平成27年度においても看護師の人材育成をテーマとしたセミナーを開催する予定である。



<基調講演>



<グループ・ディスカッション>



<全体討議の様子>

回収アンケート枚数 100 枚 (事前申し込み (学外) 者 103 名, 参加者 130 名, 回収率 77%)

1. 回答者の所属 :

- ①病院職員 62名 ②専門学校教員 8名 ③短期大学教員 0名
 ④大学教員 17名 ⑤大学職員 1名
 ⑥その他 (院生) 11名・ (研修センター職員) 1名

2. セミナーを知った情報源

- ①チラシ・ポスター 37名 ②セミナー案内 42名 ③本学ホームページ 2名
 ④友人・知人 6名
 ⑤その他 13名 (上司・主催者として・研修講師からの紹介・看護部から)

3. セミナーの内容について

N=100

	とても よかった	よかった	ふつう	あまり よくなかった	よくなかった	未記入
基調講演	62 名	35 名	2 名	0 名,	0 名	1 名
シンポジウム	54 名	40 名	5 名	0 名	0 名	1 名
セミナー全体	36 名	51 名	9 名	2 名	0 名	1 名
会場設備	40 名	46 名	12 名	0 名	0 名,	1 名
スタッフ	41 名	45 名	12 名	0 名	0 名	1 名

4. 今後の希望テーマについて

- ・ 大学と臨床をつなぐ臨床教員について
- ・ 教育と臨床のギャップを埋めるためにテーマを一つにして様々な視点で
- ・ 中堅看護師の教育・キャリアアップについて
- ・ 管理職のモチベーションの保ち方
- ・ 教育方法など、モチベーションがあがるかかわり方
- ・ チームワーク、インタープロフェッショナルワーク/エデュケーション
- ・ リフレクションなど
- ・ 看護の楽しさについて。面白さを伝えるためには。
- ・ 看護チームの多職種化 (介護士等) してくる中での教育体制について
- ・ 学生の背景が多様になっており、どんなふうに教育していったらいいか
- ・ 同じテーマを継続して行ってほしい

5. その他、ご意見・ご感想・お気づきの点

- ・臨床指導者を臨床教員がどのように育てていくか課題です。
- ・附属の看護教員です。総合病院ですが、看護部長の方は「国家試験に合格さえしてくれば、あとはうちで育てます。」と言います。臨床の育てるは、動ける看護師をどう育てるかです。ジレンマを感じています。ぜひ、教育の専門看護師コースを作ってください。そうすれば、教育に対する考え方も変わると思います。
- ・基調講演：私が新人Nsの頃は10対1看護のため、平日日勤者1チーム3人の中、新人Nsが学生を教えざるをえない状況でした。今思うと、教育に携わる今、新人でありながらも“教える視点”を学ばせていただいたなと思います。その点で、基礎看護学で教育的視点を学ぶことの重要性に共感できることが多かったです。
- ・看護教育CNSが出来ると看護界は良い方向に変わると思います。
- ・ご意見にもあったように、日本赤十字がもっと開かれたイメージがあるとリラックスして地域・教育・病院と人材育成に協力できるのではないのでしょうか。私は大学院レベルの教育がないと看護教育・看護師教育は難しいと思っています。
- ・院内での教育を担当していますが、講演でもあったように、教育を体系的に学んだことがなく、職責を果たすには力不足を感じています。しかし、これから大学で学びなおすには、諸事情より難しく短期間で（難しいことかもしれませんが）学ぶことのできるプログラムを切に望みます。本日はとても興味深く聴講致しました。ありがとうございました。
- ・学び続けることに気持ちが向いていない中堅NSの教育が難しいと感じている。学校に中堅NSが少し気軽に学べるような講義が設定されているとよい。「看護へのコミットメント維持」につながるような
- ・現場の方とのディスカッションをできたのがとても良かったです。
- ・今回の運営は参加というスタイルでとても良かったと思います。
- ・佐々木先生の「新たな計画作り」を赤十字の病院間で実施していただき、ぜひ各地域の赤十字病院がリーダーとなり、地域の病院や中小規模病院と連携し、地域全体の看護の質の向上につなげていきたいです。「佐々木モデル」「赤十字モデル」でいかがでしょうか？地域連携の一環として行うことで各病院には教育看護師域+αのメリットが得られると思います。
- ・佐々木先生の考えているプログラム是非実現してもらいたいと思いました。グループワークをもう少しあれば良かったなと思いました。とても貴重な意見が聞けたので…。
- ・どこの病院でも同じような悩み（新人教育・中堅Nsへの関わり）を抱えていることが分かった。グループワークは参考になった。
- ・15分間というタイトな時間の中でグループワークを実施したのにも関わらず、あれだけ多様な発表につながったことは期待以上でした。
- ・グループワークを通して、自分には何ができるかなと考える機会を得ました。
- ・グループワークは不要では？
- ・グループワークをするならするとプログラムを立ててほしい。

平成26年度フロンティアセミナー

シームレスな人材育成をデザインする Part II

～看護師の現任教育における病院と大学のパートナーシップ～

日 時：平成26年**12月13日(土)** 13時～16時
場 所：日本赤十字看護大学 201講義室
参加費：1,000円

I. 基調講演：13:00～14:00

「看護師に対して教育的なかかわりができる
人材の育成・支援について」

講師：佐々木 幾美（日本赤十字看護大学 看護教育学 教授）

II. シンポジウム：14:10～16:00

「看護師の現任教育における
課題と教育を担う看護師の役割」

シンポジスト：
泊瀬川 紀子（日本医科大学武蔵小杉病院 副看護部長）
福家 幸子（虎の門病院 看護管理師長）

* 申し込み方法：氏名、所属先名をfrontier-seminar@redcross.ac.jp
またはFAX: 03-3409-0589に送信してください。
申し込みの締切は11月28日(金)となります。

* 問い合わせ：〒150-0012 東京都渋谷区広尾4-1-3 日本赤十字看護大学
看護実践・教育・研究フロンティアセンター TEL: 03-3409-0875

後援：日本赤十字看護大学同窓会

3. 災害看護部門

1) 地域防災活動ネットワーク (資料3. 4. 5)

地域防災活動ネットワークは、本学前身の日本赤十字武蔵野短期大学時代の平成16年より始まった。地域の人々とともに身近な防災の知恵と技を獲得し、災害に強い人材を育成することをねらいとし、平成26年度で11年目である。

平成26年度は、武蔵野キャンパスを中心に武蔵野市民防災協会、行政と協働し、年間約10回(平成26年10月～平成27年2月)の防災ボランティアセミナーを開催した。セミナー会場は、本学武蔵野キャンパスおよび武蔵野市民防災協会である。セミナー開催に伴う運営経費は、本学と武蔵野市が半々に拠出している。企画メンバーは本学教員、地域の自主防災組織所属の住民、赤十字社員、企業員、大学教員、近隣の病院所属看護師と多岐に渡る。更に本学の学生災害救護ボランティアサークルがメンバーとして一緒に企画運営に加わり、住民と共に地域防災に関する学習や交流に取り組んでいることが特徴である。

また、本学学部1年生の必修科目「災害看護論Ⅰ」の授業の一部を本セミナーへの参加に当てている。本学学生は、プログラムの中からテーマを選択しセミナーに参加、地域住民と共にディスカッションやシミュレーションを通して交流しながら、地域防災について学習に取り組んでいる。学内では得られない住民との交流を通しての学びは、意義が大きい。各回セミナーの参加人数は22～74名と幅があるが、地域住民および本学学生を合わせ、平成26年度の全10回のセミナー参加者延べ数は509名であった。

第8回「災害時の心構えと応急処置の実際 三角巾を使った応急処置」



第9回「避難生活とケア 要援護者トリアージ」



資料 3. 地域防災セミナー参加申込数

平成 26 年度 地域防災セミナー 参加申込数

1. 参加申込数

		NO. 1	NO. 2	NO. 3	NO. 4	NO. 5	NO. 6	NO. 7	NO. 8	NO. 9	NO. 10	H26 合計
一般	申込数	31	30	42	37	50	52	54	60	59	62	477
	欠席数	△5	△8	△11	△10	△14	△15	△17	△21	△14	△14	△129
	参加人数	26	22	31	27	36	37	37	39	45	48	348

学生	申込数	11	3	47	22	32	7	14	23	10	16	185
	欠席数	△3	△3	△4	△2	△3	△4	△2	△1	△1	△1	△24
	参加人数	8	0	43	20	29	3	12	22	9	15	161

一般 + 学生	申込数	42	33	89	59	82	59	68	83	69	78	662
	欠席数	△8	△11	△15	△12	△17	△19	△19	△22	△15	△15	△153
	参加人数	34	22	74	47	65	40	49	61	54	63	509

※「申込数」は事前申込と当日申込を合わせた数。

2. 男女内訳

		NO. 1	NO. 2	NO. 3	NO. 4	NO. 5	NO. 6	NO. 7	NO. 8	NO. 9	NO. 10	H26 合計
一般 + 学生	男性	16	14	17	17	24	18	29	22	30	31	218
	女性	18	8	57	30	41	22	20	39	24	32	291
	合計	34	22	74	47	65	40	49	61	54	63	509

※欠席者は含まれない。

資料 4. 地域防災セミナープログラム

No.	日 時		内 容	会 場
1	H26 10/19 (日)	9:30 ～ 12:30	開講式 講話 「災害のメカニズムと都市型災害の予測と検証」 COSMOS スタッフ 青山真市郎氏 演習 ～オリジナル版防災クロスロード～ COSMOS スタッフ 小原真理子氏	武蔵野市役所 防災安全センター
2		13:30 ～ 16:30	防災ゲーム 「クロスロード」 ボランティア活動編 学生ボランティア団体の活動報告「想いを行動へ、そして継続」 日本赤十字看護大学 学生災害救護ボランティアサークル	武蔵野市緑町 2-2-28
3	H26 11/15 (土)	9:30 ～ 12:30	講話 「災害時に求められるボランティア活動」 COSMOS スタッフ 高田昭彦氏・阿部浩朗氏 演習 ～被災者にどう向き合うこころのケア その意義～ COSMOS スタッフ 山下カツエ氏	日本赤十字看護大学 武蔵野キャンパス
4		13:30 ～ 16:30	シミュレーション 「避難所生活体験」 COSMOS スタッフ 小原真理子氏 演習 ～被災者の心と身体をほぐすリラクゼーションの勧め～ COSMOS スタッフ 谷岸悦子氏	武蔵野市境南 町 1-26-33
5	H26 12/6 (土)	9:30 ～ 12:30	講話 「もっと知りたい災害時の高齢者支援」 武蔵野赤十字病院在宅介護支援センター長 庄司幸江氏 講話 「もっと知りたい災害時の障害児者支援」 国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所 障害福祉研究部社会適応システム開発室室長 北村弥生氏 演習 ～在宅避難を可能にする環境作り～ COSMOS スタッフ 青山真市郎氏	日本赤十字看護大学 武蔵野キャンパス
6		13:30 ～ 16:30	講話 「もっと知りたい災害時の女性と子ども支援」 演習 ～安心できる生活環境について考えてみよう～ COSMOS スタッフ 山本由香氏	武蔵野市境南 町 1-26-33
7	H27 1/24 (土)	9:30 ～ 12:30	講話 「武蔵野市災害時医療計画の改正点と今後の方向性」 ～災害時医療計画に結びつく各地域訓練の課題～ 武蔵野赤十字病院 勝見敦氏 演習 ～身に付けよう傷病者の観察～ 日本赤十字看護大学国際・災害看護学領域修士課程 松木優子氏	日本赤十字看護大学 武蔵野キャンパス
8		13:30 ～ 16:30	講話 「災害時の心構えと応急処置の実際」 演習 ～身に付けよう応急処置と搬送～ 日本赤十字社東京都支部 事業部救護課 田中真人氏	武蔵野市境南 町 1-26-33
9	H27 2/14 (土)	9:30 ～ 12:30	講話 「避難所における要配慮者の安全な環境作り」 COSMOS スタッフ 青山真市郎氏 シミュレーション 「市民が取り組む要援護者トリアージ」 COSMOS スタッフ 小原真理子氏	日本赤十字看護大学 武蔵野キャンパス
10		13:30 ～ 16:30	講話 「災害時のトイレ問題」 日本トイレ研究所 加藤篤氏 座談会 「陸前高田市の未来図」 武蔵野市役所 増田美照氏・岩手医科大学 佐々木亮平氏 閉講式	武蔵野市境南 町 1-26-33

資料 5. 平成 26 年度地域防災セミナー受講生のアンケート結果概要

1. 各セミナーの受講人数

各回の参加者数は 22～74 人と幅があるが、一般住民および学生の 10 回合計は 509 名、男女比は男性 218 人、女性 291 人であった。

2. 年代別の受講者層

「60 代」が全体の 13～36%と最も多く、次に「70 代」、「50 代」が多く参加していた。「30 代」は 10%未満であった。大学授業の一環として学生が参加している回では、「10～20 代」の占める割合が大きい。例年と変わらない受講者層であった。

3. セミナー受講者の居住地域

「武蔵野市内」、「武蔵野市以外の都内」、「東京都以外の関東圏内」に在住の方が 90%を占めていた。「武蔵野市以外の都内」の受講者が全体の 31～48%と最も多く、「武蔵野市内」の受講者は 16～36%である。

4. セミナーを知ったきっかけ

「大学の授業」を除き、「本学からの案内状」で知る方が最も多かった。案内状は、主に前年度参加された方や共催および協力機関や武蔵野市の防災訓練時に配布を行った。次に「知人からの紹介」が多かった。

5. セミナー受講への動機

「災害の知識を得る、深める」、「いざという時に備えるため」、「地域防災の役に立ちたいため」を目的に受講される方が最も多かった。受講後は「生活に役立つ講義内容で大変良かった」ことや「様々な方々の意見があり、見方によってまったく違い、最善は話し合っていくものということがわかった」という感想が聞かれた。

6. 各セミナーの受講者の評価

5 段階で概ね 5(大変良い)～4(良い)であった。主な理由は「テーマが明確」、「説明がわかりやすい」、「興味あるテーマ」であった。

平成 25 年度から引き続き、セミナー運営に携わっているスタッフや学生が自らセミナー講師となり、企画から実践までを担当する回を増やした。実践的な訓練を通じ、スタッフ自身の災害に対する知識や技術を高め、災害に関わる人材の育成・活用に取り組めた。また武蔵野市や武蔵野赤十字病院などの連携協力機関から講師を招聘することで、地域で行っている災害への取り組みを知る機会を提供できた。さらに高齢者および障がい者支援においては、専門知識提供者として外部講師の招聘を行い、災害時の要配慮者への理解が深まる機会を提供することができた。

今後の活動についての課題は、セミナー運営に携わっているスタッフや学生は、ファシリテーター役として活躍することが多く、円滑なグループワークの進行を受講者に期待されている。そのため、運営者側を対象としたワークショップなどの開催を行い、災害関連の知識や技術の向上を目指したい。

b. 日本赤十字社本社の看護部、日本赤十字看護大学の役割

日本赤十字社本社は看護部の中に浪江町支援担当者として、看護部長以下、看護部企画課長、事務担当者が、①事業概算の算出・活動資金の調整や執行、②全国7ブロックの赤十字病院から看護師の派遣計画と調整（1～2名ずつを2～3週間派遣する計画）、③いわき日赤事務所の確保と執務環境の整備、④派遣看護師のデブリーフィング、⑤調査結果データの入力と整理、等に関する活動を担った。

日本赤十字看護大学は、看護実践・教育・研究フロンティアセンターの実践部門の活動として浪江町健康支援事業を位置づけ、部門責任者がこれを担当し、いわき日赤事務所の組織と運営に関する役割を担った。具体的には、①健康調査計画の立案と実施、②現地スタッフの組織化とマネージメント、③各赤十字病院からの派遣看護師（以下、「派遣看護師」とする）の勤務表作成とマネージメント、④大学教員の派遣計画の立案と実施、⑤健康調査の結果分析、⑥浪江町保健行政（保健師）への報告と他のサポートとの連携相談、⑦現地サポート組織との連携、を行った。

c. 人員配置

いわき日赤事務所には以下のスタッフが常駐した。①事務担当職員1名（日本赤十字社本社雇用）、②赤十字病院からの派遣看護師2名、③日本赤十字看護大学の非常勤職員（看護職）1～2名とし、その日のスタッフでチームリーダーを決め、運営は日本赤十字看護大学の派遣教員が運営責任を担った。④その他に、日本赤十字看護大学及び日本赤十字看護大学同窓会の協力を得て、単発のボランティアスタッフとして大学の教職員、同窓生も配置した。

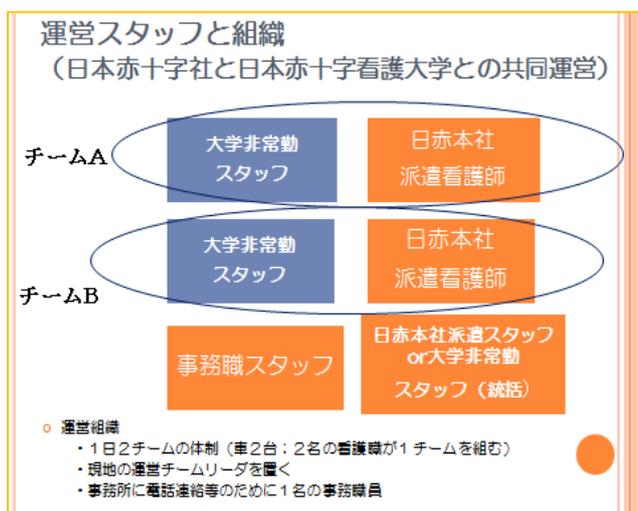


図3 いわき日赤事務所の組織図

d. 会議システム

それぞれの組織との情報交換と状況確認などのため、開設時から以下のような会議を設定し、定期的に会議を開催した。この他に、浪江町健康保険課との会議を春と秋の2回実施した。

浪江・日赤連携会議

メンバーは浪江町健康保険課の保健師、いわき市の事務担当者、日本赤十字看護大学からは、いわき日赤事務所の大学側の責任者である学部長、運営担当教員、日赤なみえ保健室のスタッフ、時に日本赤十字社本社看護部の調整担当者であった。開催は月1回とし、1年間で12回会議を開催した。

議事は、調査件数、サロン回数と参加者数、日赤なみえ保健室利用状況、調査の結果としてA判定者（要継続）に関する情報、浪江町の人口動態と今後の町の方向性（変化があったとき）、いわき市への新たな避難者データの引き渡し数などであった。討議事項としては、訪問時に問題となったケースの対処、交流会の持ち方などであった。

日本赤十字社看護部・日本赤十字看護大学連携会議

日本赤十字社看護部と日本赤十字看護大学との連携を強化し、本事業の運営を円滑にするために、赤十字組織間による会議を適時開催した。メンバーは日本赤十字社本社看護部長、課長、事務担当者、日本赤十字看護大学学部長、運営担当教員、事務担当者であった。この会議では、事業全体及び事務所の組織体制の確認（特に予算及び人事）、看護師による中長期支援の質の向上に関する検討と研修会、今後の方向性等を討議した。開催は概ね2ヶ月に1回、今年度は8回であった。

(2) 財源と事業および事業内容

日本赤十字社と浪江町からの予算が計上され、健康見守り調査のみならず、交流会も多数実施した。第二期はサロンなどの交流会の実施に力を入れた。

表5. 第二期事業の財源と事業および活動内容

財源	活動	内容
日本赤十字社（東日本大震災復興財源）	1) 健康見守り訪問	安否確認と保健・健康の状態把握
浪江町（福島原子力災害避難区域等帰還・再生加速事業費）	1) サロン	健康増進を含む住民交流会の開催
	2) 健康相談	来所、電話での保健・衛生・健康の相談
	3) 健康教室	保健・衛生・健康の相談や健康教室の開催

(2) 活動状況

<健康調査およびサロン、健康相談>

① 健康見守り訪問：安否確認と保健・健康の状態把握

対象者は、いわき市に避難してきた浪江町民である。1年目の調査時に第1回目の訪問調査を実施し1,067戸(2,256人)であった。その後もいわき市に避難してきた住民がいるため、その月単位で浪江町よりデータが送られて来た。新たな避難者は184戸(357人)であった。よって、第二期調査は、第2巡目となる対象者と第1巡目訪問時以降にいわき市に避難してきた対象者に分け、合計が1,251戸(2,613人)であった(表6)。

表6. 健康見守り訪問の活動状況

第2巡目の訪問対象者 平成25年9月30日までにいわき市に在住の浪江町民全世帯	1,067戸	2,256人
第1巡目の訪問対象者 平成25年10月1日～平成26年9月30日新たに受けた世帯	184戸	357人
合計	1,251戸	2,613人

訪問は自宅の訪問と電話での連絡を行った。自宅を訪問する前には電話で訪問日時予約を入れてから行った。中には、訪問を拒絶する例もあった。訪問後に対象者の評価を行い継続的な支援が必要な対象者を要支援者として、その後も自宅訪問または電話相談を実施した。訪問調査の総数は1,068戸であり、うち訪問件数は647戸、拒否件数は421戸であった。訪問件数の内訳は自宅訪問381戸、電話が266戸であり、この中で要支援者は80人であった。拒否件数の内容は、訪問や質問することを電話での確認時に拒否された例、及び転居・死亡・直接訪問したが応答なし等であった(表7)。

また、浪江町から送られてくるデータは、出産により子どもが生まれた場合1戸として計算し、他の地域に移動していた住民がいわき市に既に移動してきている家族と一緒に住む場合も1戸、住んでいるのは2世帯で1つの住宅に居住していてもデータ上では2戸というように複数戸として扱われていることがある。よって、データ上の戸数と実際の戸数とに差があり、実際の戸数が少なくなるという状況があった。そこで、平成26年12月以降、戸数に合わせたデータにする作業を開始したため、表6にある合計1,251戸と調査の総数1,068戸には乖離がみられている。

表 7. 平成 25 年 10 月～平成 26 年 11 月までの調査内訳

総数 1068 戸	訪問件数 647 戸	自宅	381 戸	要支援者数 80 人
		電話	266 戸	
拒否件数 421 戸				
電話回数 841 回				



家庭訪問による健康見守り調査の様子

② サロン：健康増進を含む住民交流会の開催

サロンは、平成 25 年 11 月から具体的に実施し始めた。サロンの種類は、子どもを持つ母親へのサロン、写経、小物づくりサロン、体操サロン、健康増進を目的としたサロンである（表 8）。

本事業だけでなく他の組織や自主グループもサロンや交流会を実施しており、サロンの周知や参加者の募集が難しく、参加者が少なかった。地域全体の交流会やサロンを分析し、本事業に期待されている交流会を実施していく必要があるため、次期は子どもを持つ母親へのサロンは継続していく予定であるが、他のサロンは終了とし、地域でのサロンの紹介などに変更していく。



サロンの様子

表 8. サロン開催状況（平成 25 年 10 月～平成 26 年 9 月）

テーマ	内容	対象	開催	参加者状況
子どもを持つ母親へのサロン	子どもとのふれあい、子どもの遊び、母親同士の交流	就学前の子どもを持つ母親と子ども	2-3 回/月	・ 19 回実施。 ・ 母 2-5 人/子/2—7 人。
写経サロン	写経を行う	自由参加	1 回/月	・ 高齢者が 4~5 人。 ・ 浪江町以外避難住民も参加。 ・ 女性が多い。 ・ 12 回開催。
小物づくりサロン	毛糸や布で簡単な小物をつくるサロン	自由参加	1 回/月	・ 高齢者 5~7 人。 ・ 女性が多い。 ・ 12-3 月まで実施 ・ 3 回開催。
体操サロン	音楽に合わせて体操を行う	自由参加	1 回/月	・ 高齢者の女性が 2~3 人。 ・ 参加者が 0 人のときあり。 ・ 11 回開催。
健康増進を目的としたサロン	高血圧、感染症などに関する講義、話し合い	自由参加	1 回/月	・ 高齢者の女性が 2~3 人。 ・ 参加者が 0 人のときあり。 ・ 12 回開催。

③ 健康相談：日赤なみえ保健室への来所、電話での保健・衛生・健康の相談

日赤なみえ保健室への来所による健康相談は平成 25 年 10 月～2 月までに 31 名であった。12 月は、日赤なみえ保健室の 1 階が自治会の活動スペースになっており、ここを会場にイベントを行ったため利用者が多かった。今後は、健康相談を行っていることを周知するよう広報活動を行っていきたい。健康相談の主な内容は、高血圧のためで血圧測定を希望、介護疲れの話を聞いて欲しいなどであった。3 月以降は健康相談の利用者がなく、9 月に 1 件あったのみであった。今後も、来所の方への相談を実施していることを広報し続ける。

表 9. 健康相談件数（平成 25 年 10 月～平成 26 年 9 月）

月 日	H25 年 10 月	11 月	12 月	H26 年 1 月	2 月	9 月	合計
件数	2 人	2 人	23 人	2 人	2 人	1 人	32 人

④ 健康教室：イベントなどでの保健・衛生・健康の相談や健康教室の開催

平成 26 年も 8 月にいわき市で開催される七夕祭りなどに参加し、住民の交流及び健康相談を行った。また、いわき市で実施される浪江町民検診が秋にあり、検診の補助も兼ねて参加した。

次年度も、七夕、検診に参加を進めると同時に、浪江町からの要望も聞き入れ、他のイベント時も積極的に参加したい。



浪江町自治会と子どもたちの芋掘り（イベント）



本の読み聞かせの専門家との交流（イベント）

<日本赤十字福島県支部との連携>

日本赤十字社福島県支部による救急法講習会を日赤なみえ保健室ホールで夏に実施した。参加者は 20 人であった。演習用のマネキンの搬入から当日の人員配置など支部と連絡を取りながら、初めての開催であった。今後も支部と講習会などを共同開催するように進める。

また、支部からは春に子ども用遊具の寄贈があり、子どもを持つ母親へのサロンやキッズ開放日に役立てることができた。



子どもを持つ母親へのサロンで遊具で遊ぶ子どもたち

<日赤なみえ保健室の利用促進>

支部から寄贈された遊具を利用して、4月から2回/月、キッズ開放日としてホールで子どもが遊べるように開放した。これは浪江町保健師からと、子どもを持つ母親へのサロン参加者からの要望があったためである。母親と子どもの利用は母親0~2人/子ども0~4人であった。広報が不十分なことが考えられるため、チラシの配布など広報を充実させたい。

<インターンシップの受け入れ>

本学の災害看護グローバルリーダー養成プログラム (Disaster Nursing Global Leader Degree Program : DNGL) 共同大学院災害の学生2名が、8月第1週に3日あるいは5日間のインターンシップを行った。内容は、電話での訪問予約、家庭訪問による見守り健康調査への同行、子どもを持つ母親へのサロンへのスタッフとしての参加であった。日赤なみえ保健室のスタッフとの事業に関する話し合いにも参加した。今後も、大学院生等の実習、インターンシップなどを積極的に受け入れたい。

(4) 健康見守り調査と事業の方向性

現在、第二期事業期間アンケート調査結果の分析のまとめを行っており、平成27年5月に完成予定である。調査により、地域コミュニティが持っていた「地域住民同志の見守り力」、「行政に繋ぐ力」等、「セーフティネット力（地域力）」が、震災により喪失している。これにより震災から4年が経過した現在、①経済力、②個々の対応力、③家族機能、④個人の健康問題、⑤地域とのネットワーク構築力（個人の）が、個々のあるいは家族の健康問題に大きく影響していることが見えてきた。健康問題はこれら①~⑤の要因の関連の度合いにより、個人単位、家族単位でその問題の大きさやリスクが分散傾向にある。この状況は自立して自分たちで健康問題を予防、対処していくことのできる人から、新たに健康問題が浮上してきた人（浪江町では健康問題と認識されなかった行動等が、現在の住民との関係性により異常行動と捉えられるようになり対応に苦慮しているケース等）、潜在的な健康問題を抱えており（慢性疾患や育児の悩みなど）、家族や周囲の住民との関係性等によっては、それが健康問題として顕在化する可能性のある人、現在は、潜在的な問題が見当たらないが、これから地域で生活していく中で健康問題が生じる可能性のある人、明らかな疾患や障害があり、支援が必要と判断される人、などの多様性が広がっている。

この状態は、今後、地域に在住する時間や関係性により変化していく可能性が強いが、中間層（グレーゾーン）の人々が抱える健康問題のゆく末を見守る必要があり、この見守り機能は、地域が持っていた見守り機能の補完的役割の一部を果たすことになる。

現在は、障害や疾病の重篤度が高く、支援の必要性が明確な場合は、保健行政や医療機関に繋ぐ等の対応ができています。しかし、健康問題がグレーゾーンに位置し、地域力

や見守り力がなければ、その悪化に気づくことができず、さらに悪化するケースが存在することを日赤なみえ保健室では把握している。地域力低下による問題が、今後どのように展開するか、浪江町の復帰計画が平成 29 年度と目標を定められているので、住民もこの年度を手がかりに、今後の方向性を模索する人々も多く存在すると思われる。よって、今後もグリーゾーンの人々への「健康見守り調査と支援」を実施する。

平成 27 年度の業務計画の概要は以下である。

- ① 活動内容：
 - ・ 全戸訪問
 - ・ 継続的にフォローが必要な人々への支援
 - ・ 対象者に応じた支援（例えば、高齢者であれば誤嚥予防のための口体操の実施など）
 - ・ 母子の交流会開催（母親への支援活動が地域的に少なく、かつ要望があるため）
 - ・ 復興支援住宅の入居に合わせた新規移動者への支援（安否確認、健康調査など）
- ② 人員：平成 27 年 4～9 月までは全国の赤十字病院からの派遣看護師 1～2 名/月、及び事務所スタッフとして看護師（常勤）1 名、保健師（非常勤）1 名、事務（常勤）1 名で運用する。
- ③ 連携機関：浪江町だけでなく、今後は日本赤十字社福島県支部とも連携を密にする。

3) 災害看護・支援活動情報収集

東日本大震災の復興に向けて、本学教職員、学生が様々な支援活動を展開している。ボランティアセンターでは、それら活動実績の収集および情報の発信を行い、支援している。

平成26年度の災害看護支援活動の実績は表9のとおりである。

表10. 平成26年度災害看護支援活動の実績

職位	氏名	活動期間	活動場所	具体的な活動内容	派遣仲介団体
教授	武井麻子	平成26年4月3日~4日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
教授	小宮敬子	平成26年4月3日~4日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
助手	内藤なづな	平成26年4月4日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
講師	内木美恵	平成26年4月4日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
講師	内木美恵	平成26年4月9日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
講師	内木美恵	平成26年4月21日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
助教、助教、教授	亀井緑、安島幹子、小原真理子	平成26年5月1日~5日(小原のみ2~4日)	宮城県気仙沼市面瀬仮設住宅	住民の健康生活支援活動、災害看護CNS実習の一環	日本赤十字看護大学国際・災害看護学領域
講師	内木美恵	平成26年5月13日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
講師	内木美恵	平成26年5月27日	浪江町役場(二本松)	事業打合せ	日本赤十字社、浪江町
講師	内木美恵	平成26年5月28日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
講師	内木美恵	平成26年6月11日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
講師	内木美恵	平成26年7月9日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
講師	内木美恵	平成26年7月22日~23日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
講師	内木美恵	平成26年8月4日~5日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
学部生	SKV災害看護ボランティアサークル	平成26年8月19日~24日	岩手県下閉伊郡山田町役場及び仮設住宅	住民の健康生活支援ボランティア活動	日本赤十字看護大学SKV
教授	小原真理子	平成26年8月21日~23日	岩手県下閉伊郡山田町役場及び仮設住宅、大浦町仮設住宅	学生と共に住民の健康生活支援活動、災害看護CN実習の打合せ	日本赤十字看護大学国際・災害看護学領域
教授	守田美奈子	平成26年8月25日~26日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
講師	内木美恵	平成26年8月25日~27日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
講師	内木美恵	平成26年9月10日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
講師	内木美恵	平成26年9月29日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
講師	内木美恵	平成26年10月8日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
講師	内木美恵	平成26年10月22日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町

<つづき>

職位	氏名	活動期間	活動場所	具体的な活動内容	派遣仲介団体
講師	内木美恵	平成26年10月27日	浪江町役場(二本松)	事業打合せ	日本赤十字社、浪江町
教授	小原真理子	平成26年11月3日～5日	宮城県気仙沼市面瀬仮設住宅	住民の健康生活支援活動、災害看護CNS実習の打合せ	日本赤十字看護大学国際・災害看護学領域
講師	内木美恵	平成26年11月11日～12日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
教授	守田美奈子	平成26年11月14日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
講師	内木美恵	平成26年11月19日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
講師	内木美恵	平成26年11月26日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
教授	守田美奈子	平成26年12月1日～2日	浪江町役場(二本松)	事業打合せ	日本赤十字社、浪江町
講師	内木美恵	平成26年12月1日～2日	浪江町役場(二本松)	事業打合せ	日本赤十字社、浪江町
講師	内木美恵	平成26年12月3日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
講師	内木美恵	平成26年12月10日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
講師	内木美恵	平成26年12月17日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
講師	内木美恵	平成26年12月24日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
講師	内木美恵	平成27年1月7日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
講師	内木美恵	平成27年1月14日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
講師	内木美恵	平成27年1月21日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
講師	内木美恵	平成27年1月28日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
講師	内木美恵	平成27年2月3日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
講師	内木美恵	平成27年2月18日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
講師	内木美恵	平成27年3月3日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
教授	小原真理子	平成27年3月9日～11日	宮城県気仙沼市面瀬仮設住宅	・24時間仮設住宅駐在の支援ナース及び住民のインタビュー ・3.11追悼式参加	日本災害看護学会東北プロジェクト、赤十字災害看護のリーダーシップを考える会
学部生	SKV災害救護ボランティアサークル	平成27年3月9日～11日	宮城県気仙沼市面瀬仮設住宅	住民の健康生活支援活動 3.11追悼式開催準備と運営	日本赤十字看護大学SKV
講師	内木美恵	平成27年3月11日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町
教授	小原真理子	平成27年3月14日～15日	石巻赤十字病院看護専門学校	要援護者トリアージ研究活動に関するセミナー開催	日本赤十字看護大学 チーム小原
講師	内木美恵	平成27年3月18日	日赤なみえ保健室(いわき)	サロン	日本赤十字社、浪江町

4. 研究・実践リンク部門

1) 新人看護師をサポートする会

新人看護師の職場適応や離職防止を意図して、平成 21 年度から「新人看護師をサポートする会」を開催してきた。平成 26 年度は 6 月初旬の大学祭開催時に実施したホームカミングデーに合わせて、ティータイムに「新人看護師の集い」を企画した。

ホームカミングデーの参加者のうち、本学を卒業した新人看護師 11 名が集まった。

入職して 2 ヶ月足らずの新人看護師のなかには、既に独り立ちしている人、夜勤を経験し始めた人、先輩看護師と一緒にケアをしている人など、施設や病棟によって様々な状況であった。久しぶりに再会した仲間同士で、勤務状況や勤務を終える時間などの話題で盛り上がり、所属病棟の様子を話しながら、業務の忙しさや新人としての辛さは皆同じであることを共感しているようであった。

まだ緊張の続く毎日なので疲れも出ているようだったが、看護部からホームカミングデーに参加するよう勧められた人もおり、母校で仲間や教職員とリラックスした時間を持つことができるといった。今後も、新人看護師サポートの開催時期や方法を検討していきたい。



<ティータイムの様子>

2) ケアリング・フロンティア広尾

平成 24 年度に、広尾地区にある日本赤十字看護大学と日本赤十字社医療センターと日本赤十字社総合福祉センターとが連携し、研究教育と実践がリンクして広尾地区全体に寄与する「ケアリング・フロンティア広尾」というシステムを作り、平成 25 年度より本格的に活動を展開した。年間 3 回の連携会議を開催し、各プロジェクト活動を展開している。

平成 26 年度のプロジェクト活動は、①リサーチ・フェスタ、②病院と在宅をつなぐ中間施設における看護の在り方の検討、③透析を受ける人と家族の体験を踏まえた支援の構築、④My Turn（私の出番！）プロジェクト、⑤セルフケア能力を高める支援の検討会、⑥高齢者の終末期ケアに関するプロジェクト、⑦広尾地区地域防災プロジェクトの 7 つが展開

された。

平成26年度7月3日(木)に開催した「赤十字リサーチ・フェスタ」では、95名の参加があった。内容は、①研究よろず相談(リサーチ・カフェ)と②研究交流(ポスタープレゼンテーション)であった。研究交流(ポスタープレゼンテーション)は、a.一般演題(44題)、b.ケアリング・フロンティア広尾活動報告(5題)、c.日本赤十字看護大学奨励研究報告(5題)の3コーナーを設置して、多くの交流がなされていた。次年度のリサーチフェスタは、平成27年11月に開催を予定している。



研究よろず相談
(リサーチ・カフェ)



ポスター展示・発表

ケアリング・フロンティア 広尾 日本赤十字看護大学研究支援委員会 共催 赤十字リサーチフェスタ2014

赤十字リサーチフェスタで、関心領域に近い人との仲間づくり（実践と研究をつなぐネットワークづくり）をしてみませんか

- 日時：平成26年7月3日（木）18:00～19:30
- 場所：日本赤十字看護大学 広尾ホール
- 参加者：赤十字施設で働いている医療従事者、教職員
- 参加費：500円（資料、茶菓代）

リサーチフェスタ の 内容

(1) 研究よらず相談（リサーチ・カフェ）

「臨床で研究に取り組みたいが、研究テーマをどうやって探せばよいのか？」など、日ごろ疑問に思っていることを、相談してみませんか。大学の教員がサポートします。「個別相談」「グループでの相談」どちらも大歓迎です。

(2) 研究交流（ポスター・プレゼンテーション）

研究内容をまとめたポスター（すでに発表したもので良い）を掲示し、交流する企画です。研究テーマを記載したマップを配布しますので、そこで待機している発表者と自由に交流をして、ネットワークづくりに役立ててください。

今年度は、「一般ポスター発表コーナー」の他、「ケアリング・フロンティア 広尾 活動報告コーナー」「日本赤十字看護大学巨勢研究員助成研究コーナー」も設けます。奮ってご参加ください。

● 申し込みについて（発表者、参加者）

申し込み先：researchfesta@redcross.ac.jp

氏名（フリガナ）・所属・連絡先e-mail

発表者は、研究テーマもお知らせください。

発表者申込締切：平成26年6月6日（金）17:00

参加者申込締切：平成26年7月3日（木）当日受付可

- *発表者は、当日の18:00までに、90cm×120cm以内のポスターを掲示してください。発表者は、当日決められた30分発表ポスターの前に立ち、参加者とディスカッションをしてください。

不明点があれば、下記まで、問い合わせてください。

問い合わせ先：researchfesta@redcross.ac.jp

*詳しくは 大学ホームページをご覧ください。



資料7 「リサーチ・フェスタ 2014」実施結果

- I. **開催日時** 平成26年7月3日(木) 18:00-19:30
開催場所 日本赤十字看護大学 広尾ホール

II. 参加者など

1. 参加者内訳

所属	参加者数
日本赤十字看護大学教職員	53
日本赤十字社医療センター	27
日本赤十字看護大学大学院生	10
日本赤十字社総合福祉センター	3
血液センター	1
ミネソタ大学	1
合計	95

2. ポスター発表演題

種 別	演題数
一般演題発表	44
奨励研究発表	5
ケアリング・フロンティア広尾活動報告	5
合計	54

Ⅲ. アンケート結果

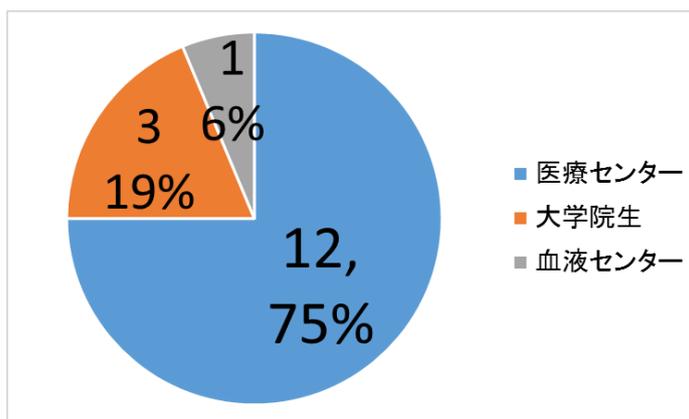
1. 回答状況

参加者 95 名のうち、アンケート回答者 16 名(回収率 16.9%)

2. アンケートの各項目への回答

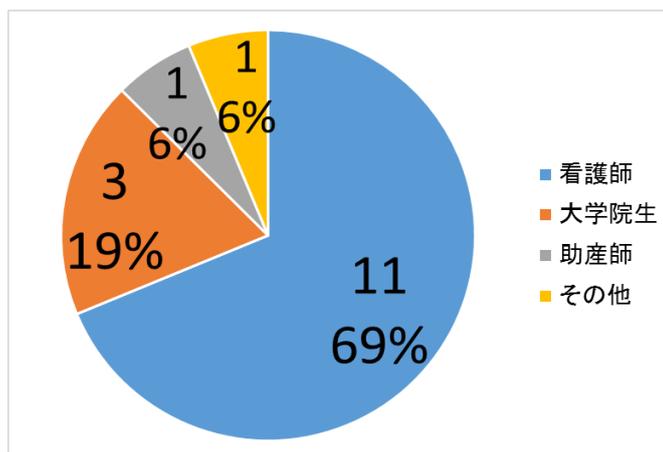
1) 回答者の所属

n=16	
項目	人数
医療センター	12
大学院生	3
血液センター	1
大学教職員	0
福祉センター	0



2) 回答者の職業

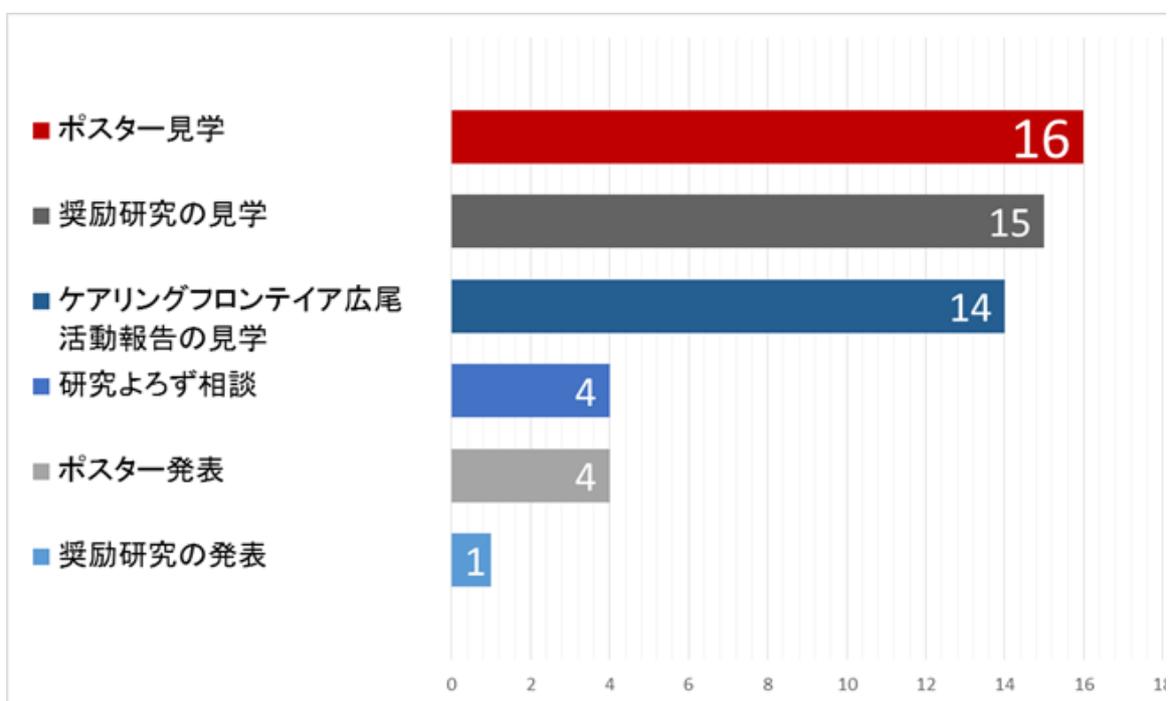
n=16	
項目	人数
看護師	11
大学院生	3
助産師	1
その他	1



3) 回答者が参加したリサーチ・フェスタの内容

(複数回答) n=54

項目	人数
ポスター見学	16
奨励研究の見学	15
ケアリングフロンティア広尾活動報告の見学	14
研究よろず相談	4
ポスター発表	4
奨励研究の発表	1
ケアリングフロンティア広尾活動報告の発表	0

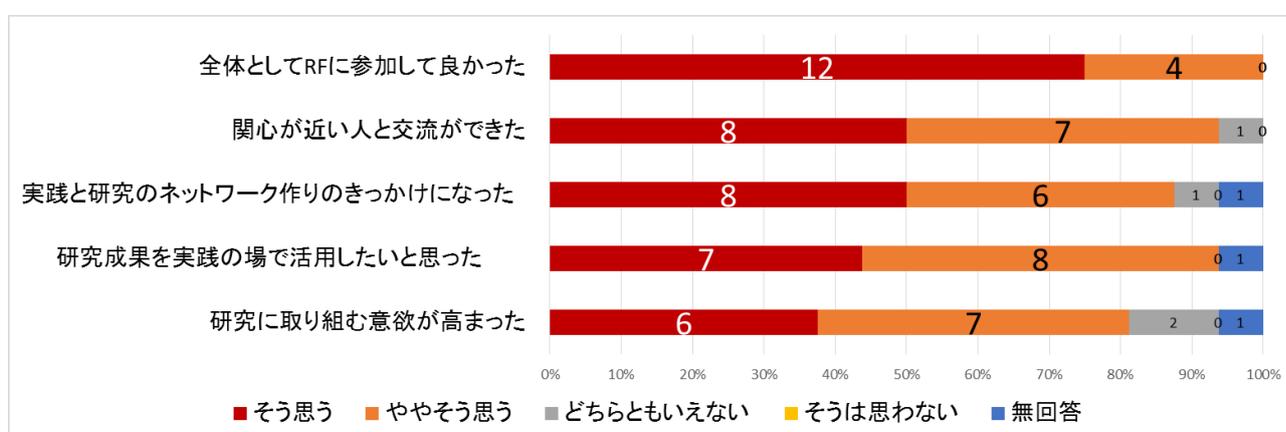


4) リサーチ・フェスタに対する感想

n=16

項目	1	2	3	4	0
全体としてリサーチフェスタ(RF)に参加して良かった	12	4	0	0	0
関心が近い人と交流ができた	8	7	1	0	0
実践と研究のネットワーク作りのきっかけになった	8	6	1	0	1
研究成果を実践の場で活用したいと思った	7	8	0	0	1
研究に取り組む意欲が高まった	6	7	2	0	1

1 : そう思う 2 : ややそう思う 3 : どちらともいえない 4 : そうは思わない 0 : 無回答



5) 自由記載

感想

- ・ 実践で行っていることが研究されており、文面で読むことで理解が深まった。顔見知りの先生方と話ができ、研究への興味が更に深まった。臨床にいるとなかなか研究を深めることが難しいと感じるが、今回の交流を受けて、ネットワーク作りのきっかけとなり、また参加したいと感じた。
- ・ 卒業してから5年経ちましたが、知っている先生方がたくさんいて“ホームに帰って来た”という気持ちになりました。テーブルに花がありとても良かった。ありがとうございました。
- ・ 看護研究に取り組みたいと考えていますが、多忙な中でのモチベーションの維持などが難しいと思っています。ただ、今日来てみて心が前向きになりました。

今後の要望

- ・ とくになし

平成 26 年度 日本赤十字看護大学 看護実践・教育・研究
フロンティアセンター実績報告

作成年月 平成 27 年 3 月

発行 日本赤十字看護大学 看護実践・教育・研究フロンティアセンター
編集 フロンティアセンター 広報

〒150-0012 東京都渋谷区広尾 4-1-3
日本赤十字看護大学
電話：03-3409-0875
FAX：03-3409-0589

印刷 西谷印刷株式会社
